モネ
――絵画にみるジャポニスムそしてイタリアの影響――

文学部４年　安　松　真理子

＜目次＞

はじめに
Ⅰ．モネと印象派
　(1) モネの少年時代
　(2) サロンの存在
　(3) 印象派への道
Ⅱ．睡蓮の美しさ
　(1) モネと光
　(2) モネと日本の美
　(3) 睡蓮の源泉
Ⅲ．モネとイタリア
　(1) マッキアイオーリの特徴
　(2) マッキアイオーリとカフェ
　(3) 印象派そしてイタリアの影響
おわりに

はじめに

私はフランス留学していた時，多くの芸術作品に触れあう機会があった。モネ，ルノワール，セザンヌ，ゴッホなど，数えきれないほどの画家たちの作品を自分の目で見ることができた。

フランスの首都パリは，誰もが知っている都市であり，世界的に有名な都市である。多くの人は一度パリに住み生活を送ってみたいと思うであろう。まさに，私もその一人である。国の重要文化財に認定されている建物や世界遺産に登録されている場所，映画の舞台など数えきれないほどの名所という名所を持つパリは，宮殿，建物，美術館，博物館など，街にあるものが歴史を持ち，すべてが芸術であると言っても過言ではない。

世界的に有名な美術館が存在するパリは，ルーブル美術館，オルセー美術館，国立近代美術館など，パリには数十もの美術館がひしめき合っている。私は，観光客が必ず訪れる美術館を含め，多くの有名な美術館に自ら足を運

び，見て歩いた。中でも，オランジュリー美術館に所蔵されているクロード・モネの「睡蓮」にとても魅了された。この「睡蓮」を見るために，私は何度も美術館に通い続けた。何度見てもまた来たいと思わせる。このような絵画はどのように描かれているのだろうか。世界的に有名な，数知れないほどの芸術作品を作り上げたこの巨匠たちはどのような背景で描いてきたのだろうか。私は，私を魅了したクロード・モネについて書いていきたい。また，フランスだけでなく日本，そしてイタリアとモネの関係も追求していきたい。

図１：クロード・モネの「睡蓮」

Ⅰ．モネと印象派

(1) モネの少年時代

モネはフランス美術史で最も有名な画家のひとりである。彼の晩年の姿は，髭を長く生やして，見た目はクリスマスプレゼントを持ってきてくれるサンタクロースのようだ。彼の描いた絵はあらゆる年齢層の人々を魅了し続けていると言ってもいいのではないだろうか。モネの絵は見る者を幸せにする，心を温かくしてくれる効果があるように感じる。

モネは，父のクロード・アドルフ・モネと母のルイーズ・ジェスティーヌ・オブリーの間に末っ子として生まれた。1840年，モネはノートルダム・ド・ロレット大聖堂で洗礼を受けた。実際，私もメトロのすぐそばにあるこの大聖堂に足を運んでみた。とてもきれいな聖堂であるのに，至るところが老朽化し錆びついて，時代を感じさせていた。それに，人気もないせいか，とても寂しく，教会という温かさよりも冷たさを感じた。しかし，クーポラに描

かれた天井画がとてもきれいで言葉を失ったことを覚えている。

現在のモンマルトルの地区でモネの父は商売をしていた。だが，商売はうまくいかず，1854年パリを離れ，家族で郊外のルアーヴルへ向かうことを決心する。今でこそ，人気の観光名所となっているモンマルトルだが，当時はとても貧しい地区だったのである。ルアーヴルには，モネの父の異母姉が嫁いでいたため，その店を手伝うこととなった。結果，モネの父親は異母姉の夫の事業を引き継ぎ，安泰な生活を送ることができたのである。また，モネが画家になろうと決心した時に，その土地で支援者をみつけることができるという利点もあった。しかし，モネは勉強を嫌い，学校は牢屋だと言ったり，いたずら書きなどをしていたと言われている。さらに，高校の試験であるバカロレアを受けなかったそうである。それほどまでも，勉強を嫌い，そして画家になることを決心したのである。

(2) サロンの存在

1859年の春に，パリに到着したモネは開催中のサロンを訪ね，自由な校風の画塾であるアカデミー・シュイスに登録することになる。モネはグレールのアトリエに入るが，結局1864年に閉鎖されてしまい，若い画家たちは自分たちの力でサロンを目指すことを決意したのだ。当時，40万人もの来場者を記録する年もあったサロンは，画家としてのほとんどの登竜門であるため，評価はとても厳しかったのである。

しかし，この時代，そのサロンと呼ばれる展覧会の存在が彼らの人生を大きく変えていったと言ってもいいのである。そもそもサロンとは何なのだろか。彼らを大きく変えたサロンとはどのような意味を持っているのだろうか。

サロンとは，画家を目指す当時の人たちの公的な展覧会であり，サロンに入選しなければ，一人前の画家として認めてもらうことができなかった。それどころか，公に作品を見せることすら許されなかったのである。言わば，世間に認めてもらえなければ，画家としての人生は終わりであると言っているかのようだ。なぜならば，好意的なサロンの評価は，宣伝効果はもちろん

のこと無名の画家を１年もたたないうちに裕福な流行画家に変えてしまうこともありえたのだ。しかし，サロンに出品される絵画の多くは悪評で，そのような絵は落選するしかなかったのだ。サロンの審査員があまりにも多くの作品を落選させるため芸術家たちはナポレオン３世に請願書を送ったり，サロンとは別に,「落選展」を開催するか，落選した作品を展示させてくれるよう許可を求めた。実際，ナポレオンは審査の通った作品と通らなかった作品を見比べたそうだが，両者の違いがわからないことを認め，結果，画家たちに落選展の準備を推し進めることになった。

(3) 印象派への道

「印象派」という言葉を知っている人は少なくないだろう。印象派と言えば，モネ，ルノワール，マネ，ピサロ，セザンヌ，ゴッホなどが挙げられる。彼らは西洋美術史において知名度と人気を誇る人物であり，印象派を作り上げてきた巨匠たちである。また，日本でフランス印象派作品を展示する美術館は，いつどのような場所でも多くの人々で賑わっている。2010年６月に日本で開催されたルノワール展覧会やルーブル美術館展などは誰にとっても記憶に新しいだろう。

では，この時代にはこの落選展を画家たちはどのようにして開かれていったのか述べていくとする。1873年にモネは，作品を個人に直接売ることが難しかったため，たくさんの人々に作品を見てもらいたいと考えた。サロンなどにとらわれずに，自分たちで思う通りにやってみることを掲げ，グループ展の開催を真剣に考えるようになった。モネやルノワール，ピサロ，ドガを中心として展覧会の準備を進めていく中，内部分裂を繰り返していった。中でも，仲間の多くがグループ展内のみに出品を限定しようとしたが，ドガは反抗したのだ。サロン落選者たちの展覧会という色眼鏡で見られたくないといった理由からである。そこで，入選経験のある画家たちを多くこの展覧会に迎えたのである。これこそが，まさに第一回印象派展覧会である。一言でグループ展と言っても，個人では全然違う物を描いてきたのである。美しい

女性を愛したルノワール，風景を好んだシスレーやピサロ，一瞬の動きをとらえようとするドガ，点画が特徴の新印象派主義のスーラなどがある。この展覧会はサロンの権威に対して対抗し，立ち上げた独立展覧会であったのだ。

1873年にモネが印象派の展覧会に出展し描いた「印象　日の出」は曖昧で形しか見えないものであった。多くの人はモネの絵は下手で，急ぎすぎて失敗した作品であると評価していた。さらに，追い打ちをかけるように，モネの「印象　日の出」を見た美術記者のルイ・ルロワが「印象派展覧会」というタイトルでこの絵を，書きかけの壁紙の方がよっぽどましだという内容を書き，嘲笑の記事を掲載した。モネの描いた作品の「印象」という言葉をとり，この記事からサロン落選者たちの集まったグループ展のことを「印象派」と名付けられた。また，印象派のインプレッション（impression）という言葉は，ラフスケッチ（rough sktch）という言葉を指す意味でもあったため印象派という名前で確立していった。

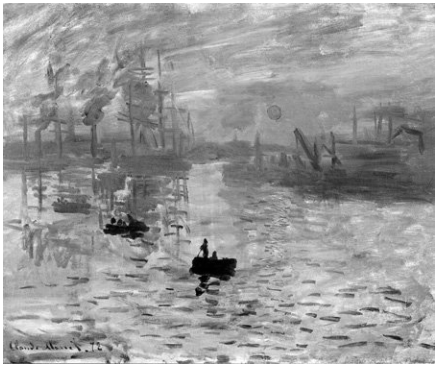

図２：モネ　「印象　日の出」1873年

そもそも印象派とはどういったグループなのだろうか。印象派のもととなる印象派主義とは19世紀後半にフランスで誕生し，世界各地に美術や芸術の新風を起こした芸術運動のことである。この「印象派」ができたきっかけは，この時代の巨匠たちの展覧会での「出会い」である。もし，彼らが一人ひとり出会わなければ印象派は誕生しなかったであろうと考える。印象派は絵のことだけではなく，モネを初めとする印象派の画家たちで，これまでになかった新しい描き方を始めたのである。

図３：ルノワール
「ピアノの前の少女たち」1892年

図４：ゴッホ
「タンギー爺さん」1887年

18世紀まで，画家は依頼された絵を描いていた。依頼主と画家との間に契約書も用意されており，絵を描くテーマは依頼主によって指定されていたのである。このような契約書はたくさん現存しており，描かれる人物の人数，装飾の要素，使用する色やその配分までもが指定されていることがわかる。今でも，公式な絵や宗教画，王族や国家元首などの肖像画などはこのような依頼によって描かれている。19世紀初めのロマン派の時代から画家は自分で主題を選ぶようになっていった。そして，絵を気に入って買ってくれる購入者を画家自身が見つけなければならなくなったのだ。

モネの場合，特定のパトロンと言える人物がいないが，モネの絵を集中的に買って支援してくれていた人物がいる。エルネスト・オシュデである。彼は，モネをはじめとする印象派のピサロやシスレーなどの絵を購入し，結果として画家たちの生活を支えたのである。

ところが，しだいに，より明るい色彩，戸外制作の絵画，大まかな筆触と近代生活の主題も主流画家たちの作品において絵画に現れ始めていた。印象派が悪評とさらされたこのような技法は，もはや公衆を怒らせることはなく

なったのである。そして，個人でも有名な画家として知名度を上げ，世界的に知られていくのである。

Ⅱ．　睡蓮の美しさ

(1) モネと光

次に，モネの人生で偉大な作品であり，私を魅了した「睡蓮」に目を向けることとする。

1883年，モネが晩年を過ごしたとされるジヴェルニーに転居すると，モネは庭作りに情熱をかけ始める。モネが58歳の時，作品を描く最高の舞台を造り上げるため６人の庭師を雇ったのだ。庭の設計から種のまき方までを自分自身で指示しながら日本風の庭に仕上げていった。1893年には睡蓮の池を中心とした庭を造り，この庭をモチーフとして代表作である「睡蓮」が制作されることになった。モネは戸外での制作にこだわり続け，季節や時間，天気によって変化する光を描きとめることが多くなっていった。そのことを実現するために一枚の絵だけではなく,同じ風景を数点の絵画に表していく「連作」という形式をとり始めた。唯一，モネがこだわったのは，本当の光そして想いのままを描くことだった。水の反映をうまく利用することで，限定された画面に予想以上の広がりを持たせているのだ。

図５：睡蓮の連作　オランジュリー美術館

光を写し取ることに魅了された画家と自然が密接になった印象派時代だが，画家によっては光の捉え方も様々であった。印象派を代表する画家からシスレー，モネ，ルノワールの描いた３枚の水面を見比べているとよくわかる。

19世紀後半の印象派の風景画は多く水面を描いている。画家は，うっそうとした森を抜け，セーヌ河などの明るい河辺にイーゼルを置いた。光を描くには水面が一番効果的だからである。最も現地制作にこだわったシスレーは，わざわざ洪水の後を選んで写生している。モネは水面の画家と呼ばれるだけあって，晩年の睡蓮の連作では睡蓮と雲や柳の映りこんだ池の水面が渾然一体となった独自の境地に至っている。同じ印象派でも，女性の絵を得意としていたルノワールは水面のさざ波の表現が不得意だった。代表作の「大きな水浴の女たち」でも，女性の入る池は水には見えないのだ。しかし，シスレーやモネにも描けなかった光り輝く美肌の女性にとって，水は光を吸収する背景に等しかったのだろう。

印象派と光は切っても切れない関係である。彼らは，自然は一刻一刻と変化するのだから，細部にはこだわらず全体をみながら色彩をキャンバスにおいていこうと考えた。そうすることで，ブレやボケが多い作品が生まれたのだ。これこそが印象派画家の原点というべきものだろう。水や大気を，光の中の一瞬の表情として，ありのまま写し取ることが印象派を作り上げたのである。

もう一つ，モネが野外で睡蓮を描くことができた理由がある。それは，絵の具チューブの発明である。現在私たちは，絵の具を持ち歩き山や海などの戸外で絵を制作することができる。それは，この時代に開発されたチューブ入り絵の具のおかげなのだ。このチューブが出回るまで，印象派の画家たちは，その都度，自分自身で絵の具を練り合わせ色を作っていたのである。

実際，モネは戸外制作の作品を見て，絵画の色彩の鮮明さに驚異と疑念を抱いたそうである。それもそのはずで，印象派以前の画家たちは自分自身のアトリエで入念に丹精に仕上げることが常識であったのだ。主に，戸外で描いた作品はアトリエで描くための習作であったと言われている。この絵の具チューブの発明のおかげで，誰でも容易に絵の具を扱い持ち歩き，戸外で制作できるようになったのである。人々は，外へ出かけることが多くなり列車に乗って海辺に行ったりできるようになるということが起きた。戸外で絵を

描くことは，その題材と一般的な絵の美学に大きな影響を与え，架空の生き物や神聖な存在ではなく実在するもの，現実の世界でいつでもどこでも誰もが見ているようなものを描写することに焦点をあてることが多くなっていったのである。太陽の下で絵を描くことで，色調は明るくなり，天候がすぐに変わることから，ほんの一瞬をとらえるスケッチの技法がとられるようになった。また，この頃に鉄道が発達し始めたが，列車から見る風景は，ぼやけて細かいところまでみえないのだ。モネをはじめとする画家たちは，そんな感覚をも絵に捉えていったのである。

(2) モネと日本の美

ところで，モネの庭は，ヴェルサイユ宮殿のように並んだ庭ではなく，どこか日本風な美学が備わっている。実際彼は，睡蓮の池を掘り，日本語で太鼓橋と呼ばれるル・ポン・ジャポネを建て，棚に藤を絡ませたのである。睡蓮も東洋風だからという理由で庭に浮かべた。モネの二つの庭には，日本から送られてきた桜，りんご，紅葉などを含め百数種類の植物があったそうである。モネは，自宅を日本風にアレンジしていたのだ。さらに，ルーアンの植物園から分けてもらった植物や，カタログを見て取り寄せた花々や外国から輸入された珍しい植物も植えられていた。

中でもモネは，艶やかな色を咲かせる牡丹がとても気に入っており，日本からフランスに送ってもらっていた。このようなことができたのは，日本人の画商との出会いがあったからだろう。その画商とは，林忠正である。林忠正は，貿易会社の通訳として渡仏し，パリで日本美術の紹介者として活躍していた。また，浮世絵の代わりにモネの作品を受け取ったり，モネの好きだった日本の牡丹や菖蒲を贈ったりする間柄にもなった。二人はそれほどまでも日本とフランスの交流を大事にし，両国の懸け橋となったのである。

モネが日本美術に深い共感を覚えたのは，浮世絵における自然景観の表現の多様さ，明るい色の組み合わせ，独特の視点による画面構成などがヒントになったからだろう。特に，季節や気候を敏感に表現する浮世絵の風景画は

移り変わる自然をキャンバスに描こうとするモネの絵画と似ている。モネが冬の景色を好んで描いていることも，モネの浮世絵コレクションに冬景色を表現した作品が多いことと関係しているだろう。さらに，彼が1880年に南仏の海辺を舞台に描いた多くの風景画には，樹木や岩や山などのモチーフや全体の構図や空間表現において，北斎や広重との類似性が見えてくる。

「睡蓮」を描いた晩年の作品に見られるように，最終的に色彩と筆触で画面を装飾化する方向へ大胆に進んでいくモネの自然表現に，日本趣味は大きく影響を与えたのだろう。

図６：モネの庭　ジヴェルニー

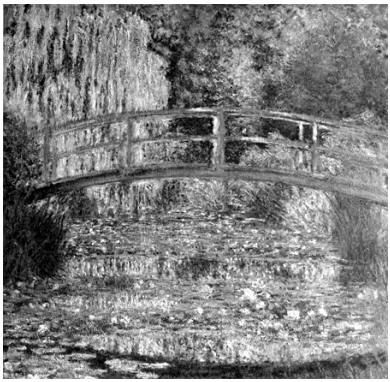

図７：モネ
「睡蓮の池，緑のハーモニー」1899年

(3) 睡蓮の源泉

19世紀後半のヨーロッパでは，日本に対する関心が高まり，明治維新の頃には日本ブームと呼ばれる状況が生まれた。日本ブームが生まれた背景には，日本の美術工芸品がフランスに流入し，多くの人々を魅了したことがあった。では，日本文化はフランスでどのようにして紹介されて，広まっていったのだろうか。

日本の開国とともに，日仏間の文化的交流が始まり，その後飛躍的になっていった。中でも，人気が高かったのは，浮世絵であったそうである。

図８：モネ
「サン＝タドレスのテラス」1867年

そもそも，最初に日本に足を踏み入れた外交官たちが，日本の自然や宗教，社会や文化，生活習慣などを紹介する旅行記や見聞録を雑誌記事などの形で公に発表することで日本の紹介は始まったとされている。さらに，1860年代の初めには，パリで日本の作品を扱う商店が存在していた。ジャポニザンと呼ばれる日本美術愛好家たちは，この商店で，日本の作品を入手することができたわけである。

1872年に批評家たちはモネが水面の反射や揺らめきを色調に表していることを日本の浮世絵から借用したのではないかと述べた。彼らは，日本美術からの影響を明確に指摘し，そのためにモネは大胆で斬新な彩色を残しているのだと述べた。また，モネが後に西洋絵画では珍しい「連作」という形式を用いた背景にも同じ主題で何枚も描かれる浮世絵や屏風図といった日本美術の影響が指摘されている。モネ自身，浮世絵は睡蓮の源泉であり，昔の日本人の美学であったのだろう。

モネの作品に,「サン＝タドレスのテラス」という作品がある。きらめくエメラルド色の海に，４人の人物が向かっている。前景の椅子に座る男女はモネの父とルカードル夫人である。一方，フェンスのところにいる男女はモネの従姉妹であったそうである。一見，くつろいだ光景はきわめて厳格な幾何学的構造によって配置されている。場面は，海，テラス，空という水平な

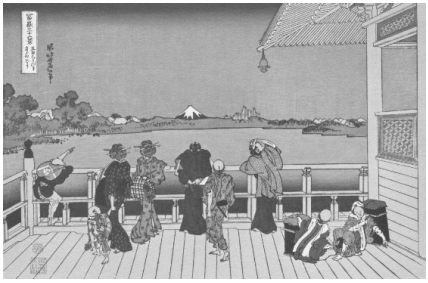

図９：葛飾北斎
「富岳三十六景」1823年

３本の帯に分かれている。モネは，この作品を仕上げるために葛飾北斎の浮世絵をもとにしている。新しさに対するモネの興味は，斬新な構図にも表れてあるが，これには写真や日本木版画の影響が指摘されている。モネは浮世絵の鮮明な色彩，西洋式遠近法の欠如などが気に入っていたそうだ。

そして，印象派時代の芸術家たちの中には，日本美術の特質や思想を生かし，芸術を変革しようとする動きが現れていた。これをジャポニスム，日本語で日本主義と呼ぶ。中国とは異なる日本という極東の国に特別な関心を持つ人々が現れたのだ。中でも，印象派の巨匠たちが一番魅了されたのは，浮世絵だった。多くの画家は，浮世絵の斬新な構図，大胆な色彩表現を吸収し，自らの作品にも反映させたのである。

では，モネにとって日本はどのように映っていたのだろうか。どうして，数ある国のなかで日本という国に魅力を感じたのだろうか。モネの絵画に現れた日本の文化としては，見返り美人風にポーズさせて描いた「ラ・ジャポネーズ」が挙げられる。この絵には，侍の図柄が大きく刺繍された派手な着物をまとったフランス人女性が壁面の前で身体をくねらせている絵が描かれている。この女性は，手に扇子を持っており，背景には日本のうちわが飾られている。このくねらせた身体こそ，菱川師宣による一人立ち美人図の姿勢なのである。モネは，その日本独自の美学に共感し，それまでの西洋絵画になかった絵画を創造したのである。

モネは積極的に浮世絵を収集し，ジヴェルニーの自宅では，食堂，寝室，階段など，今でもいたるところに浮世絵が飾られている。その数は，292点とまでいわれている。モネが愛した浮世絵は，主に歌川広重と葛飾北斎である。富士山や波といった日本独特の絵がモネを惹きつけたのであろう。現代の多くのフランス人も，日本の絵画はとてもすばらしくきれいだと絶賛している。

Ⅲ．モネとイタリア

(1) マッキアイオーリの特徴

1908年，モネはアリス[1)]とヴェネツィアを訪れた。10月から12月の間の滞在中に，モネは画家たちに愛されていたヴェネツィアの絵画を37点描いている。また，ゴンドラの絵も多く見られる。ヴェネツィアで，建築と水，そして光を描き続けていった。モネにとって，ヴェネツィアの水に反映する水の都への旅は，建築物に対する画家の関心を引き寄せたのである。また，この旅によって，大画面に描くことへの画家の熱意はさらに強められていった。モネはヴェネツィアにある16，17世紀の偉大な画家たちの作品や，聖堂だけではなく貴族の宮殿を飾る巨大な装飾壁画にも感嘆したそうだ。

画家は，多くの国を旅することで，たくさんの文化を知ることができる。また，画家は見た風景を記録し，多くの要素を絵に描いている。その絵が後世に引き継がれ，歴史となるのである。イタリアには，知名度のある多くの画家が存在する。歴史的にもそしてイタリア文化にも影響を与えた画家もたくさんいる。その中でも，印象派の画家たちがイタリアに紀行し，イタリアの画家から影響を受けた背景はあるのだろうか。

イタリア語で，「シミ」や「斑点」，「無法者」という批判的な意味を持つ「マッキア」から名付けられたグループがある。1850年代から70年代にかけてフィレンツェを中心とするトスカーナ地方で活躍した画家たちのことだ。マッキアイオーリと呼ばれた彼らは，トスカーナの大地や風俗，同世代の歴史的事件などを活き活きと描いた。その特徴は，画面を色や陰影のブロックで大まかにとらえ，絵筆のかすれで絵のグラデーションを表し，陰影や量感をざっくり表現している点にある。この手法は，ルネサンスの巨匠ティツィアーノも用いた，伝統的な下絵を描くための手法だったそうである。このグループは1855年にフィレンツェで起こった。彼らは，当時の美術教育に疑問を持った芸術家だった。ジョヴァンニ・ファットーリやシルヴェストロ・レ

ーガ，テレマコ・シニョリーニといった若き芸術家たちは，伝統と因習にこだわるアカデミスムの絵画に対し「マッキア」いわゆる「染み」を使用した新たなスタイルを生み出したのである。新しい様式を模索している内に，フランスのバルビゾン派の手法に目を付け，マッキア画法に至ったのである。マッキアイオーリは1800年代のイタリアにおいて重要な絵画運動であったとされている。19世紀のヨーロッパでも最も独創的な最先端に立つ芸術の一つだったのである。

マッキアイオーリが目指したのは，アカデミスムの教育が重視していた形態描写ではなく，目の前に展開する瞬間の「真実」を色彩や明暗でありのまま表現することだった。いわば，市民の生活に根ざしたリアリズムであったのだ。伝統的なアカデミスムに対する反動で，日常的な風景を好んで描いていたそうである。マッキアイオーリは，希望へと向かうイタリアの「今」を，そして民衆の現実をリアルタイムに描き，伝えようとした。下絵から完成作の過程の長さを踏んでいてはインスピレーションが失われてしまうと思ったのである。

以上のようなマッキアイオーリの特徴は，フランスの印象派の特徴とよく似ている。だが，両者の共通点は，それだけにとどまらないのである。

(2) マッキアイオーリとカフェ

マッキアイオーリであるための定義がある。フィレンツェの「カフェ・ミケランジェロ」に通っていた画家たちであるということだ。マッキアイオーリがカフェで集い郊外に行ったこともフランス印象派と共通している。印象派の画家たちはカフェ「シャ・ノワール」に集い，ノルマンディーやブルターニュなどの郊外を好んで描いた。一方，マッキアイオーリの画家たちも「カフェ・ミケランジェロ」に集い，フィレンツェ郊外のピアジェンティーナやセッティニャーノに移り住み，自然や農村で生きる村人を描いた。また，雄大な自然をパノラマ[2)]で描くために，横長の木板を好んでキャンバスにしていたのである。

マッキアイオーリの画家が集い，そして議論を交わしたとされるカフェは，フィレンツェのラルガ通りにある。マッキアイオーリの画家たちは，カフェに集まっては，旧来の体制に対抗し新しい政治や芸術について語り合っていたそうだ。そもそも，マッキアイオーリがこのようにカフェで集まり議論を交わさなければならなかったことの背景は何かあるのだろうか。フランスの印象派のように，サロンという壁や，自分たちの力で社会を変えていこうとした根本的な理由があったのだろうか。

そもそもイタリアでマッキアイオーリができた一つとしてのきっかけは，イタリア語でリソルジメントと呼ばれる政治的な運動である。大きな統一へと流れ共に歩んだのが，マッキアイオーリであった。彼らは，旧来の体制に反抗したいという姿勢を明確に打ち出して，このような名前をつけられた。染みだらけの子供が書いたような絵という侮辱の意味が込められた言葉であり，世間からは悪評だったのだ。しかし，彼らはこの「マッキアオーリ」であることに対し，とても誇りを持っていた。フランス印象派の画家たちもそうであったように，この両者とも自分たちの属するグループの名前をとても誇りに思っていたことが挙げられる。

そして，サロンとしてはフィレンツェで開催されていた。展覧会にマッキアイオーリとして出展することはあったのだが，サロンといった大きな場所を持つことができなかったため「カフェ・ミケランジェロ」がその役割を果たしていたのだ。

また，マッキアイオーリの画家たちがテーマにしていたのは，母国イタリアの美しい風景であり，その断片である。ローマ時代の遺跡や都会の風景を絵の題材にしたのではなく田舎と呼べるような作品を多く残している。雄大な草原や牛や馬がのんびりと佇む農地，

図10：シニョリーニ
「セティニャーノの菜園」

岩だらけの海岸線など画家が慣れ親しんだ景色ばかりである。

また，風景画だけではなく肖像画や室内画なども存在し，絵のモデルとなったのは画家の家族や知人が多く，モチーフに対しての愛情が作品に込められているものばかりである。ありふれているけれども，楽しい雰囲気に満ち溢れた情景は光の描き方なども優しく包み込むような効果をもたらし，観ている側にも優しさを与えてくれるのである。

彼らマッキアイオーリは,印象派と同様に光と影の色彩を生き生きと画面に再現することを可能にした。伝統的なアカデミスムのスタイルに反発して,目に見えるもの,肌で感じることができるものを描き,自由な発想で表現していった手法は印象派そのものだ。まさに，イタリアの印象派と言えるだろう。ところが,1861年にイタリア王国が成立し,1866年に経営上の都合によって「カフェ・ミケランジェロ」は閉店に追い込まれていった。そして,マッキアイオーリの画家たちはそれぞれで個性を発揮しグループはばらばらになっていくことになる。

(3) 印象派そしてイタリアの影響

イタリアとフランスは国境を接しているが，イタリアの影響はフランスの印象派にあったのだろうか。そうだとすると，どのようにして伝わったのであろうか。

マッキアイオーリの画家にイタリアの画家であるフェデリーコ・ザンドメネギがいる。彼は，1841年にヴェネツィアで生まれた。ザンドメネギは1866年から1874年までヴェネツィアに定住し，後に1874年以降はパリに移ることを決心する。印象派の画家のドガと仲が良く，印象派の光とマッキアイオーリの手法を吸収した花や室内人物を描いている。そして，もう一人ジュセッペ・

図11：レーガ「庭園での散歩」

デ・ニッティスと呼ばれるマッキアイオーリの画家がいる。彼は，モネやドガと交流があり，カイユボットに言われモネの作品を購入したりしていた。また，1875年にフランチェスコ・ジオーリ，エジスト・フェローニ，ニコロ・カンニッチはパリを訪れて「サロンでの休息」と呼ばれる作品をサロンに出品することになる。経済的な理由からマッキアイオーリに名を連ねていた画家たちは後にパリに移動し,印象派展に参加していたのだ。当時,パリに住んでいたディエゴ・マルテッリを通じてカミーユ・ピサロやイタリア出身のフェデリーコ・ザンドメネギなど多くのフランス人画家と交流していた。

図12：モネ
「アルジャントゥイユのひなげし」1873年

このような交流がありイタリアのマッキアイオーリの作品がフランス印象派に持ち運ばれたのだろう。イタリアの画家たちのこのような動きはフランスの印象派よりも早く，国際的な文脈から見ても独創的であったため，フランス印象派の先駆けと言われている。イタリア印象派が与えた影響は日本のジャポニスムほど大きな影響ではないが，印象派を確立する要素となった。だが，当時のイタリアの国力はそれほど強くなかったため，フランスの印象派のような世間に圧倒的な影響力を持つことはできなかったのである。それは，トスカーナという地域が原因であることが挙げられる。パリのようなマーケットが当時のイタリア国内には存在していなかったため，商業的に成り立たず，一地方の一過性の芸術運動で終わってしまったからである。

そして，マッキアイオーリが誕生し，その後にフランスの印象派が誕生した事実が存在する。私も，実際に両者の作品をみて，とても類似性があると感じた。ぶれやぼかし，それから描きたい物を題材として，思うがままに絵を描いている点である。両者の作品は，見ているものを魅きつけるものがある。これから先，マッキアイオーリと印象派たちの絵画が歴史において重要

な役割を示すものであるように感じる。

おわりに

モネはまさに光の画家であり，水の画家である。海やセーヌ河などの河川を描き，求めるものは池の水面に映し出される光や色などである。時には，雪や霜，雲，蒸気などの「水」を描いてきたのである。モネは，永遠に終わりのない「光」を題材にし，光に心を動かされ，光がなければモネは絵を書かなかっただろう。また，光が反射し草花がきれいな状態にならなければ，モネを惹きつけることもなかったのだ。それほどまで，光を追い続けてきた光の画家はクロード・モネだけである。この光とモネの出会いのおかげで，このような世界的にすばらしい作品に出会うことができたのだ。モネの絵は初めて見た人にでも親しみや温かさを与えてくれる作品である。何も考えず作品を見ることができてしまうのだ。まさに，心から安心できる絵である。

また，フランスの印象派以前に誕生していたマッキアイオーリの存在は，フランス印象派に影響を与えたであろう。肌で感じることを自由な発想で表現していった手法，カフェでの討論，画家として認めてもらいたい気持ちは両者とも共通している。そして，フランス印象派が誕生するきっかけとなったのかもしれない。マッキアイオーリのユニークな活動は美術史上で重要な試みとして近年再評価の機運が高まっていくと感じる。そして，フランスの印象派やマッキアイオーリの絵はこれから先，何百年と残り，多くの人々に温かく心がほっとする効果を与えてくれるだろう。

図版出典

図１．http : //www2.plala.or.jp/Donna/monet.htm

図２．http : //image.search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF－８&fr=top_of3_sa&p=%E3%83%A2%

図３．http : //www.salvastyle.com/menu_impressionism/renoir_piano.html
図４．http : //www.salvastyle.com/menu_impressionism/gogh_tanguy.html
図５．http : //image.search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF−8&fr=&p=%E3%83%91%E3%83%AA
図６．http : //www.google.fr/imgres?imgurl=http : //giverny.org/gardens/fcm/giverny.
図７．http : //image.search.yahoo.co.jp/search?p=%E3%83%A2%E3%83%8D+%E5%A4%A
図８．http : //image.search.yahoo.co.jp/search?p=%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%BF%
図９．http : //image.search.yahoo.co.jp/search?p=%E5%AF%8C%E5%B6%BD%E4%B8%89%
図10．http : //www.museum−cafe.com/special/1944.html
図11．http : //www.teien−art−museum.ne.jp/exhibition/macchia/index.html
図12．http : //image.search.yahoo.co.jp/search?p=%E3%83%A2%E3%83%8D+%E6%

注

１）モネの２人目の妻である。１人目の妻は病死している。
２）内部から見られる円筒周面に，風景がなどを記述したものである。

参考文献

・井出洋一郎『絵画の見方・楽しみ方』日本文芸社，2008年。
・及川茂『最後の浮世絵師』日本放送出版協会，1998年。
・小田茂一『絵画の「進化論」』株式会社青弓社，2008年。
・カーラ・ラックマン『モネ』岩波書店，2003年。
・塩田博子『美術から日本文化を観る』文芸社，2002年。
・島田紀夫『印象派絵画の見かた』株式会社東京美術，2007年。
・島田紀夫『印象派の挑戦　モネルノワールドガたちの友情と闘い』小学館，2009年。
・シルヴィ・パタン『モネ　印象派の誕生』創元社，1997年。
・ジャポニスム学会『ジャポニスム入門』思文閣出版，2000年。
・ディヴィット・ボンフォード『絵画の保存』株式会社ありな書房，2010年。
・中西繁『光と影を描く』講談社，2008年。
・フィリップ・フック『印象はこうして世界を征服した』白水社，2009年。
・藤原えみり『西洋絵画のひみつ』朝日出版社，2010年。

・マリナ・フェレッティ『印象派』株式会社白水社，2008年。
・南川三治郎『モネの庭』世界文化社，2004年。
・三井秀樹『美のジャポニスム』文藝春秋，2001年。
・安井裕雄『モネ　生涯と作品』東京美術，2010年。
・山田五郎『西洋絵画入門』幻冬舎，2008年。
・山岸健『絵画を見るということ』日本放送出版協会，1997年。
・http : //www.tokyoartbeat.com/event/2010/5175
・http : //www.museum−cafe.com/special/1944.html

注　参考文献

1）http : //stephan.mods.jp/kabegami/kako/GardenVe.html
2）http : //ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%BC%E3%82%BC%E3%83%AB